

炎天河

- ENTENKA -

題字 大東守

写真と文 池内文藏



第8話

離はなれの庭に現れた―三郎―と名乗る壮年の男は、菱烏帽子なええぼしに直垂ひたたれという市井しせいの隠居いんきょのような風体ふうたいをしていた。が、その正体は幕府を実質的に支配する内管領ないかんれい・長崎左衛門尉高綱ながさきざえもんじょうたかつなだった。

柘植五郎つげごろうに見張りを命じなかに招じ入れた正遠まさとおを前に、三郎こと高綱は「昼間は倅せがれどもが無礼れいしもうした」と頭こゝろを垂れながら、懐から二枚の土器かわらけと由比ヶ浜ゆいがはまあたりの市で手に入れたであろう干し魚を取り出し、腰に下げた瓢箪ひょうたんから酒を注いだ。「貴公きこうに似て美男みなんじゃ、御嫡男みたくさな・高資たかすけどのでござるか」との正遠の問いに高綱は頷うなづきながら「その後ろにおった敵たかついのが次男つぎなん(高貞たかさだ)」と返し「こいつは顔こそ悪いが素直で優しい男でな、嫡男たくさなはその逆。母親が違ちがうもんで」と笑い「弥四郎やしろうのところは確か…」と水を向けた。

「嫡男たくさなは六波羅ろくはらに出仕する傍ら日野中納言様ひのちゆうなごんさまのお世話に」との返答に「それは祝着しゆく、中納言様ちゆうなごんさまとはわしも懇意こんいにしておる。ただ、その子息こしよがいささか…」と、高綱の喜色のなかに浮かん
だ鋭利な眼光えいがんに気付かぬふりで正遠は間もなく元服させる予定の次男や、先年和泉みなづみの和田氏わだうぢの
女むすめとの間に生まれた男子の腕白うでしろぶりを述べた。高綱が干し魚を噛みながら遠い眼で「わしもお

主も腕白小僧だったのう」としみじみ頷く。

駿河の国の隣接する土地の地頭職の子として育った二人は、弘安8年(1285年)の冬に起きた「霜月騒動」で初陣を果たした。この戦いは、二度に渡る元寇(蒙古襲来)に対峙した8代執権・北条時宗の死後、その嫡男・貞時の外戚として御家人筆頭の立場にあった安達泰盛と、貞時の傅として得宗家被官(北条氏嫡流の執事)筆頭にあった平頼綱の対立を端緒とするもので、貞時を奉じて先制攻撃を仕掛けた頼綱らによって源頼朝挙兵以来の一の御家人安達氏は滅びた。高綱はその頼綱の甥に当たり、得宗家を継いだ貞時のもとで重用されることになった。一方、正遠の楠木氏には安達氏が治めていた河内の観心寺荘が与えられ、二人は西と東に別れた。その後、恐怖政治を推し進めた頼綱は、正応6年(1293年)の鎌倉大地震に乗じて自らが養育した貞時に討たれ、得宗家被官筆頭の地位には高綱の父・光綱が就いた。

―得宗様の御恩、海よりも深く山よりも高し―

そう呟きながら相変わらずの鋭利な眼光で同意を求める高綱に対し正遠は―そうだな―と頷きながら酒を注ぐ。高綱の祖は、治承寿永の乱(源平合戦)において壇ノ浦に散った平資盛(清盛孫)の遺児だと伝えられている。合戦後の苛烈な落ち武者狩りによって平家の主な血脈が絶たれるなか、三浦のように多くの家人を持たない北条は「身内人」として密かにこれを保護した。やがて遺児は成人し平盛綱と名乗って歴代執権に執事として仕え、その孫のひとり駿河の国の地頭職となり「長崎」の苗字を名乗った。正遠の祖もまた同様の経緯で身内人となる。鎌倉で兵力を蓄えた頼朝を討つ為、東海道を進軍する平維盛(資盛の兄)の合流を待っている。駿河目代・橘遠茂とその一族は、頼朝とは別働の甲斐源氏・武田信義の襲撃に遭い一族は四散。当主・遠茂が討たれるなか、その子らは武田軍のなかにいた若い武将によって助命された。その若者こそが石橋山で敗北した頼朝の命で武田に援軍要請の為に派遣されていた北条義時だった。橘の一族は義時のもとで功を挙げ、やがて故郷駿河の地頭職に就き、その地名から「楠木」を名乗った。

「弥四郎よ、一年といわず、もっと鎌倉にいてくれぬか…のう」

少年の頃のような瞳で懇願する「三郎」の容貌に、河内の国で元服を待つ多聞丸が重なった。